
妖犬友人帳

あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖犬友人帳

【Nコード】

N9513W

【作者名】

あや

【あらすじ】

時は現代 殺生丸とりんの娘である月詠は後を継ぐために、そして強くなるために
殺生丸の牙でできた刀 天響牙を腰にさし 阿咩とともに旅に出た。
そんなある日 月詠は妖の見える人間の少年と招き猫と出会う。

第1話 出会い

とある田舎 高校生が走っていた。ジョギングしているわけではない。追いかけられているのだ。

人には見えない妖にだ・・・

「ぜえ・・・ぜえ・・・ニヤンコ先生め・・・後で覚えとけよ・・・」
高校生の少年、夏目は息を切らしながら自称用心棒に愚痴を零す
「レイコく友人帳よこせ」

「うわっ!？」

妖の手が伸びる・・・もうだめかと思ったその時だった

ザシュツ

「ぎゃああああああああ」

「え?」

なんと妖の方が傷ついたのだ。夏目は慌てて後ろを振り向いた。そこにいたのは自分ぐらいの女の子、
でもただの女の子じゃなかった。だって側には鞍と轡と手綱をつけた双頭竜、
服装は水色の花の模様が入った白い着物に青い袴を履いており、白銀の毛皮を羽織っていた。

手には異様な雰囲気のある刀があり極めつけは金の瞳、白銀の長髪、頭の犬耳だった。

そして彼女は言う

「人を傷つけるのなら容赦しないわよ」

その睨みは怖かった

「ひいひいひい」

妖が去っていた後彼女は刀を鞘に納めた

「大丈夫？ 災難だったね」

「あつ．．．ありがとう．．．俺は夏目。君は．．．妖？」

夏目は疑問に思ったことを聞いた。すると彼女は答える。

「私は月詠、この子は阿吽よ。半妖なの」

「．．．半．．．妖．．．」

ガサッ

「片方が妖でもう片方が人間ということだ」

「ニヤンコ先生つどこ行ってたんだよ！？ 大変だったんだぞ！！」

そこに現れたのは饅頭のごとく丸々太った．．．．．猫だった。
月詠は思わず

「．．．．．猫？」

「猫じゃなあー！ っこれも上級な妖だぞ！！」 「いっ一応本来の

姿は妖らしいけどね………」

「……なるほど……スンスン……たしかにそんな匂いがするわね」

月詠はニヤンコ先生を持ち上げて匂いを嗅ぐ

「月詠って犬の半妖なのか？」

「そうだよ、お爺さまと父上が犬の大妖怪なのっ強くてかつこいよー」

その言葉にニヤンコ先生は興味を持った。

「ほう……どんな名のだ」

「お爺さまは鬪牙王で父上は殺生丸よ」「何い!？」

「ど……どうしたんだよニヤンコ先生」

「そいつらはまさに西国を治める大妖怪、犬妖怪の王と言っても過言でもないわっ!!!」

「ええっ!!!」

「そうだね……お爺さまはその実力と心の広さで慕われていたらしいし、父上は力は受け継いでいて勝負になると本当に強いからね」

「でもどうして君たちはここにいるの?」

「さっきの通り父上は西国を治める大妖怪、唯一の子である私が継

ぐんだけど……………」

「なるほど半妖だと人間よりは強いが妖より弱い、だから修行に来たのだな？」

「ええ……ここにはたくさん妖がいるわ……だからできる限り強くないと……………この天響牙と阿咩と一緒にね」

そついいながら刀を握りしめた。

「天響牙？」 「妖刀だな」

「私が生まれたとき父上が自分の牙で刀を作って欲しいって刀鍛冶妖怪に言ったの……………それが天響牙よ」

「先生、妖の牙で刀ができるものなのか？」 「特殊な技が出せるがな」

「そんなわけで当分ここに暮らすからよろしくね」

「ああ……………よろしくな」 「よろしくするなら七辻屋の饅頭な」

こうして夏目達は出会った。この出会いが今後どうなるかまだ誰も知らない。

第2話 ツユカミ

星の綺麗な夜だった。月詠は阿吽に乗って夜の散歩に出かけていた。

「綺麗な、阿吽」

「ぎゃう」

夜の散歩を楽しんでいたそのときだった。

「！」

「どうしたの？何かあった？」

とりあえず月詠は阿吽の行きたがっている方向に進んでみた。でもそれが災難だったかもしれない。

「出て行け酔いどれ中年妖怪共！！！」

「中年！？」「ひゃー」

「！」

耳に響く夏目の怒声とニヤンコ先生・・・・・・・・と翁の面を被った小さな妖が飛んできたのだ

月詠は慌ててキャッチする。

「なっ夏目！一体何が・・・」

「えっ月詠！阿吽！・・・なんでここに」

どうしているのか聞いてみると阿吽が行きたがり行ってみると夏目の怒声とニヤコ先生達が飛んできたと説明した。

「そうだったのか・・・阿咩もごめんな・・・実はちよつとしたわけがあったんだ」

夏目はこの小さな妖ツユカミの名前を返すため友人帳を開いた。名前はあったのだが祖母レイコのせいでもう一枚ひつついていて無理にとれない。

だからひつついている奴の名前と同時に返さなくてはいけない。今日は遅いので明日に備えて寝ようとしたが二人が酒盛りし始めたのだ。

しかも夏目の上で・・・

「怒るのも無理もないよ」

「なんだとおっ」

「とにかくわたし達も手伝うよ 夏目寺子屋もあるでしょ？」

「ありがとつ月詠」

「恩にきるよお嬢ちゃん」

こうして夏目達の妖探しが開始された

第3話 ツユカミ

「こっちじゃ お嬢ちゃん、この七つ森の奥の祠に私は住んでるんじゃ」

そう言いながらツユカミは月詠と阿吽を案内する。

夏目は学校なのでニヤンコ先生と一緒に居なかった。

そして二人は夏目達が来るまでの間、レイコが名前を奪った妖はどんなのかを話したりした。

しばらくするとお上品そうなおばあさんが歩いてきた。

おばあさんは水の入ったガラスのコップに一本の花を生け、蜜柑を一つ供え

手を合わせた。彼女が帰った後月詠は聞いてみる

「誰？あのおばあさん」

「ハナさんじゃよ、彼女は小さい頃からよくお参りに来てくれるの」

ツユカミは本当につれしそくに話した。唯一ここにお参りする方らしい。

すると遠くから夏目とニヤンコ先生が現れた。

ツユカミと月詠は祠の近くでこっちこっちと手を振るが夏目は青ざめた。

「祠に住んでいるって………あんた神サマだったのか!？」

青ざめるのも無理も無い、昨夜の無礼三昧………崇られる………
かと思いきや

ツユカミは笑いながら言った。

「いやいや そう呼ばれているが元は祠に住みついた宿なしの物怪だよ」

彼が言うには昔旱魃が起こり村人は祠に祈った。次の日偶然雨が降った。

村人達は露神と崇め自身も力に溢れ、姿も立派になったそうだ。

……でも信仰薄れるにつれて縮んだのだ。今はハナさん一人だけだろう。

すると夏目はコートのポケットからある物を出した。それは蜜柑だった。

「……蜜柑あげようか」

「ふふ、蜜柑はもうあるよ」

そう言いながらハナさんから貰った蜜柑に触れる。

「さつきそこで上品そうなおばあさんに会ったよ その花と蜜柑はあの人が？」

「おお ハナさんというんだ ここに拝みに来てくれる人だ」

「よく来るんだって」

ツユカミと月詠の言葉に「へえ」と答える夏目だった。

場所は代わって夏目の家、ツユカミは自分の体には大きい筆を持ち、似顔絵を描くそうだ。

ちなみに例の妖怪は友人帳で呼べないらしい。顔も名前も知らないから……

そして似顔絵が完成したのたが……

「名は忘れたがこんな奴だったぞ」

言うならば腹に参の字が書かれたキュウ太郎だった

「……わたし知ってるオバケのキュウ太郎！」

思わず叫んでしまう月詠 夏目達は冷静に言った

「……毛は無かったの？」

「毛は無かったの」

「これあてにしているのか？」

「これしかあてにできないの」「できないね」

「……でこのキュウ太郎はどこの沼に住んでいるんだ？」

「いや、そいつは水妖怪ではなくて 三ノ塚の山に住んでいたぞ」

「「ぷっ」」

もう三人は限界だった。

「ぶはははは」

「あはははははは おっ・・・お腹があ・・・」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「お前さん達・・・」

その日から三ノ塚でキュウ太郎（仮）探しが始まった

夏目とニヤンコ先生は近くに住む妖達に全然似てない似顔絵見せながら見たことないかと聞く。

ツユカミは鳥に、月詠は阿吽に乗って探したり、時々夏目はレイコに間違われて襲われて大変だった。

そしてある日 いつものように月詠は阿吽とともに探していたその時だった。

「おじよーちゃん！見つけた！キュウ太郎が見つかったんだ！」
ツユカミは大きい声で見つけたことを知らせる。月詠は急いで聞いた。

「どこなの!？」

「三ノ塚におったわい、とにかく夏目達も呼ぶぞ」

「わかった 阿吽に乗って こっちの方が速い」

月詠とツユカミは阿吽に乗った後 ものすごい速さで夏目の家に向かった。

コンコン

「夏目、夏目」

「月詠 ツユカミさま」

「夏目、見つけたぞ」

ようやく見つかった。夏目達は用心のため丸鏡持って三ノ塚の山に行くことになった。

三ノ塚についたが逃げた後だった。でもまだ遠くへは逃げてはいないはず

夏目は分かれて捜すかと言い出したそのときだった。ニャンコ先生と月詠が何かを感じ取った。

やばいのがくると・・・

「何！？そんなのかまっていたらキュウ太郎に逃げられる・・・

ニャンコ先生、頼めるか？」

「喰ってもいいなら」

「妖怪も食べるのか・・・・・・？」

「わたしもキュウ太郎の臭いさえわかれば捜せるのに・・・」

「・・・臭い？」

ツユカミが言うには陰を伝って移動する妖だそうだ。ふと瞬間だった

「まいりました」

遠くの木の下に妖が現れた。参りましたと言いながら・・・

第4話 ツユカミ

「まいりました」

木陰に妖がいた。夏目と月詠はなんだと思っ。

「まいりました」

いつの間にかその妖は近くの木陰に居た。夏目はゾツと寒気がした。次の瞬間その妖は消えた。……消えた……そう思ったその時だった

「まいりました」

夏目達の立っている木陰に現れたのだ。すると夏目は気づく……妖の腹にキュウ太郎の一番の特徴である参の文字あったのだ。

「こいつがキュウ太郎!？」

「そう!あいつ!！」

「似てないっ!全然似てないわ!！」

「ヘタクソ!！」

ニヤンコ先生はそう言いながら攻撃しようとするが

ばしんっ 「ぎゃっ」

返り討ちにされてしまった

夏目と月詠はツユカミに言われて鏡の反射光で目眩ましをしようとするが妖に捕まってしまった。

でもそのとき、夏目の頭に何かが入り込んだ。それはこの妖と祖母

レイコの出会いだった。

「夏目」

「う……先……生……月詠……」

「さがれ」 「くらえっ！」

「ぎゃあ」

ニヤンコ先生と月詠が作ってくれたスキをつき夏目は妖とツユカミの名を返す

ぱんっ

二人の名が書かれた契約書を銜えて言った

「ススギ」「ツユカミ」名を返そう」

ふっと二人の名が書かれた契約書に息を吹き込むとしゆるしゆると名前がススギとツユカミに入っていた

こうして二人の名は無事に戻った。しかし翌日ツユカミの元へ行ってみるとツユカミはさらに小さくなっていた。

唯一信仰してくれたハナさんが逝ってしまうのだ。彼女が逝けば彼は消えてしまいうらい。

夏目と月詠は代わりに自分たちが信仰する、毎日来ると言った。でもツユカミは「これでいいんだ」と言った。

「ありがとう夏目、月詠嬢ちゃん、斑、阿咩」

露神は消えていった。空から雪が降る……明け方まで……
・彼はハナさんに会えただろうか……

そして夏目ずっと雪の中に立っていたので熱を出した。ニヤンコ先生に今ならパクツといけるといわれ、体はだるいはずなのに大げんか勃発、当然塔子さんに怒られた。すると

ガラッ

「お見舞いに来たよー大丈夫」

「月詠っ！……阿咩！……」

「実は犬妖怪一族に伝わる薬持ってきたんだっ！私も風邪引いた時は飲んだし、これさえあれば一発だよ！」

「あ……ありがと……」

夏目はお礼をいいながらその薬を飲もうとしたその時だった。

「まっまてい!!夏目」

ニヤンコ先生は慌てて止める

「え?」「ごくん

「ぐはっ!?!」

どさっ「夏目!?!」 夏目は倒れてしまった。妖たちの薬は

苦い薬草 妖の生き肝に 毒蛇の生き血

良く効くのだがまずすぎて良薬は口に苦し以上なのだ。

「わーっ夏目ーっ!?!」

夏目の熱は治ったが違う意味でしばらく寝込んだとさ。

第5話 八ツ原の怪人

「　」

天気の良いある日、月詠は阿吽と散歩していた。まだ寒いが運動すれば温かいからだ。

するとどこからともなくドンドンと太鼓を叩く音と「そのけーそのけー」という声、
そして「やめろー」と怒る夏目の声だった。そこには通学途中の夏目、しかし前には
太鼓を叩く一つ目妖、後ろには紅い番傘をさした牛妖怪がいた。

月詠は思わず話しかけてしまう

「何やってるの？夏目」

「……………月詠助けてくれ」

何でも二人が住む八ツ原に妖怪退治きどりの人間が現れたらしい。そこで噂に名高い夏目に
そいつを退治してもらおうした。当然、夏目は断ったのだがこの後が大変だった。

誠意を見せるため送り迎えすると言い出したのだ。

「……………わかった。邪魔しないように彼ら見張るから」

「ありがとう」

夏目は月詠に心から感謝した。

ざわざわ

「おはよー」

「ほおーこれがガツコウですかあ」

体育の時間

「夏目様ー」「がんばれー」「ほらほら邪魔しないっ」

がりがり

「「きゃつきゃっ」「「あいつら・・・」

二人は地面に大きく呪と書いていた。そのときだった。

「「じらあっ」

ドコツバキッドスツゴスツ

月詠が父親ゆずりの拳骨を喰らわせたのだ。夏目は思わず青ざめた。

「（何やってんだか・・・）」

ふと夏目は何かに気づく。少し離れた所に自分と同じように窓の

外を見る黒髪の男子がいたのだ。

すると男子もこっちに気づいたのか目が合った。そして男子はにや

・と笑い

教室に入っていった。

「（・・・何だ？この感じ・・・）」

夏目はそのように思った。

第6話 八ツ原の怪人

放課後……まだいる一つ目と牛に夏目は話だけは聞くと
言うとう降参した。

妖怪退治きどりの人間はいつも突然強力な靈波を放つので姿は
見れないらしい。

人の匂いはするようだが……

夏目は思う、妖怪のせいで周りになじめない人なのか……と

「わからなくもないな」

「？」

その時だった。

にゅうと足に伸びる長い手、それを皮切りにたくさんの小妖怪が現
れ、

夏目と月詠に襲いかかる。

「人間だ」

「人間がいるぞ」

「おのれ人間め」「我らを追い出しに来たか」

「わ……違……」

「ちよっ……放してっ」

「ニヤ……ニヤンコ先生……」

「やめなさ……」

ピシッ なんだか空気が変わった。

「来た 奴だ」

「夏目つかまれ」

カツ

「ニャンコ先・・・」ニャンコ先生は本来の姿になると夏目を乗せて木の天辺まで飛んだ。

月詠も阿吽に乗り空に避難した。

ほかの皆はなんとか逃げられた様だ。月詠の耳と鼻でわかったことだ

とにかく夏目の答えは

「とりあえず相手の顔は拝んでみたい。」

少したったある日、夏目とニャンコ先生が歩いていた。月詠は話しかける。

すると夏目は有力な情報を話した。

「実は同じ学校の田沼って奴が妖見えるらしいんだ・・・八ツ原近くに住み始めたらしいしな」

「なるほど……たしかにその田沼って人みたいよね」

そしてしばらく歩くとそこにいたのは黒こげの中級妖怪、一つ目と牛だった。

「夏目様……月詠様……」

「わっどうした中級!!」「黒こげじゃないっ!!」

「くらってしまいました まともに……」

二人がいうには退治人はまだ森の中だそうだ

夏目は思う

どうしてこんなことが出来るのか……と

第7話 八ツ原の怪人

とにかく夏目達は田沼らしき退治人を追うことになった。

しかしそのとき、しゃんしゃんと鈴の音が何処となく鳴った。現れたのはバカでかい馬のような妖だったのだ。

「(でかつ!!)」夏目と月詠は心の中で思う。

なんでもこの妖も名を返して貰いに来たようだった。

でも、あいにく立て込んでいる。ニヤンコ先生が勝手に

「人退治の算段をしている」と言った。

すると妖・三篠はお手伝いすると言い出した。

「それに先刻 私の家来が主に助けてもらったそうで」

そう言っただけ見せたのは一匹の三本線のかわいい蛙だった。

夏目とニヤンコ先生には見覚えがあった。

「あ、三本線の蛙……」

「……かわいいわね……」

「良いことはしとんだな夏目」「先生は黙っててくれ」

すると黒こげの中級たちは夏目の敵が森に潜んでる、ご成敗を！
！と言ってしまったのだ。

「承知」三篠は一気に飛んでいく。夏目達は慌てて追いかけた。

夏目はどこだ 早く見つけないと 走りながら焦る。すると人影
が見えた。

きつとあれだろうと思ったそのときだった。

「夏目っ！上!!」「!!」

月詠の言葉に上を見ると三篠が今にも人影を襲いかかるうとしていた。

夏目は身を挺して庇うように抱きつく

ニヤンコ先生は叫んだ

「！ 夏目命令しろ 奴の名を！！」

はっ

「止まれミスズ！！」

何も痛くない……夏目は目をゆっくり開けると三篠は

「ぐ……」

止まっており、そのままずしんと地面に倒れた。まるで月詠の叔父、
犬夜叉の
おすわりみたいだ。

とにかく無事で良かったと胸をなでおろす。すると

「……一体どうしたんだね少年」

田沼ではなく眼鏡をかけたお坊さんだった。

「おい」

「「！」「」

「お前達、もう一度包み隠さずきちんと話してみてくれないか」

「嘘ついたら本気の毒華爪喰らわすわよ」

先ほどのお坊さんは新しく来た廃寺のお坊さんで性格は勤勉、しよつちゆう払いに

来るようになった。そして霊力も強いので夏目の力で退治しちやえと考えたらしい。その言葉に夏目と月詠は呆れる……。

「お、お前達ねえ……」「……馬鹿みたい」

「ひい申し訳ございません!!」

「これ、少年さつきから何をひとりで喋っているんだい？」

「「「「「(え!?)」「」「」」

お坊さんは説明した。自身の息子が敏感で体を壊すと……なのに周りは

妖が出ると有名なので気休めにお清めしていたのだ。

夏目の後ろで「見えぬとは!!」とぺちやくちや喋る中級たち

ニヤンコ先生は修行で身に付いたのだろと言った。

夏目は苦笑いしながらほどほどしてやってください。と言った

お坊さんは見えているのかねと聞いた。夏目は無言になってしまった。しかしそんな彼にお坊さんはもう何も聞かず、やさしく言うてくれた。

夏目は思わず名前を聞いてしまう。

「……………ご住職お名前は？」

「ああ私、姓は田沼と申します。」

お坊さんは田沼のお父さんだった。

翌日、学校で中級たちが扇子を振り、月詠と阿吽が注意する。その様子を田沼が見ていた。

「見えるのか？」「え……………」

「グラウンドに変な物でも見えるか？」

夏目の問いに田沼はもう一度窓の外を見て　フツと笑った。

「いや。でも一瞬何か変なものの影がみつつ見えたような気がしたんだ

何故かだけど……………透けてだけど犬耳の女の子が見える」

田沼は夏目に話しかけたかった様だ。自分と何かが見える夏目にそんな彼に夏目は言った。

「俺は見える　すごく変なもの。でも内緒な。」

やっぱり おれ達二人が変なのかもしれないし。」

「……………そうか……………そうだな……………」

「……………そうだな……………」

田沼も夏目もうれしそうだった。

「……………あ……………あの犬耳の女の子は月詠って言って父親が犬妖
怪、

母親が人間の半妖なんだ。良い奴だし見えるんだったら田沼もきつ
と仲良くなれるさ」

「ああ……………楽しみだな」

夏目の紹介で月詠と田沼が会うのは放課後のことであった。

第8話 ダム底の燕

月詠は嫌な予感がしていた。夏目の近くにニャンコ先生以外の妖の臭いがしたからだ。もしかして取り憑かれているのかと思い、阿吽を連れて

会いに行くと鳥の字をくずして書かれた布製のお面をつけた女性の妖が

夏目の隣にいた。

「……………取り憑かれた？」

「……………探し人がいて人間である俺といれば

もしかしたら見つかるかもって……………」どんよりとした空気で説明する夏目。

人探しする妖はどんな人を探しているのかを夏目と月詠に言った。

「顔を見ればわかるのですが詳しくはわからないのです」

「……………」

「わかっていることといえば二葉村に住んでいた「谷尾崎」という名の男

だったことくらいです」

「二葉村ってお前が住んでいるダム底のに沈んでた村のことか？」

「はい」

しかし村が沈んだのは二十年前、長期戦覚悟だった。

翌日学校……………

夏目はジュース飲みながら何気なく北本に聞いてみた。

「なあ北本、二葉村って知っているか？」

「ん？おれの父ちゃん二葉村の出身だけど？」

「……（ええ！？）」「……意外な情報に三人はびっくり、夏目はとうとうぶつとジューズを吹き出してしまった。」

北本が言うには「二葉村の者はほとんどこの辺りに越したらしい。しかも谷尾崎の名は聞いたことあるし今夜住所聞いてみるといってくれたのだ。」

放課後・・・帰り道

「意外とすぐ見つかったね」「よかったな」「はい」

そして彼女は嬉しそうに笑う

「ふっふっふっふっふ」

「……………」

「あ、夏目様。月詠様」

チュンチュン

「すずめ」「ふっつかわいいね」「……おー」

しかしすずめはバサバサと飛んで行ってしまった。

「「あ
「

「あーあ」ちよつと残念そうに声を上げる妖……でもその後を「ふふ」と楽しそうに追いかけた。

やっぱりダム底の外の世界が楽しいんだ……と月詠は思った。

すると妖はあることを聞いて来た。

「夏目様と月詠様はきょうだいいいますか？」

「いや、残念ながら血のつながった身内はもうひとりもないんだ」「私はきょうだいはいないけど、お婆さまと父上がいるわ」

二人の答えに妖は

「そうですか」「お前はいるのか」「はい4人」

「でも皆わたしのせいで死にました。」

今度はこんなことを聞いて来た。

「夏目様、月詠様 手をつないでもいいですか？」

さびしいのがわかったのか夏目は無言のまま、
月詠は笑顔で彼女に手を差し出す。

彼女は嬉しそうに二人に手を伸ばした。

「つめたい手だな」「はい」

でも月詠にはわかっていた。

本当はつめたくて気持ちがいいと言いたかったと……

「あ、夏目様、月詠様 雨が来ます」「え?」「解るんです」

「雨を予言する……鳥 そうかお前、
もとは燕だったんじゃないのか?」

「はい そうだったかも知れません」

「それじゃあこれからは燕って呼んだほうがいいかな?」

月詠の言葉に夏目も同意する

「ああ……良い考えかもしれないな……」

「・・・・・・・・はいっ！」

彼女・・・・・・・・燕は一段と嬉しそうに答える

その後 迎えに来たニャンコ先生に三人の手をつないだ姿を
突っ込まれたのはいうまでもない。

夜 燕が言った通り 雨が降った。

その雨はすぐにあがった。・・・・・・・・

第9話 ダム底の燕

翌日、北村のおかげでようやく谷尾崎の住所が割れた。よけいな者まで着いて来たが燕は急に走った。

「あの人の匂いがする」と

しかしニヤンコ先生の余計な言葉で夏目と月詠は慌てて止める。そのせいで燕はびたんと転んだ。当然怒る「タヌキだるま」と言いながら

対してニヤンコ先生は「B級妖怪」と言った。

そんな二人に呆れながら夏目は聞いた。

「燕、とにかくなぜ逢いたいのか話してみてくれないか？」

燕は妖になる前は鳥の雛だったらしい。でもある日巣から落ちてしまった。

だが、やさしい人間が巣に戻してくれた。なのに彼女に「人間の匂い」が

ついてしまい、親鳥は巣ごと放棄してまった。

きょうだいの命は消えてしまい気づいたら彼女は妖になっていた。

ある日繁みの中で動けない彼女にエサを置いてく人間が現れた。それが谷尾崎だった。彼は野良犬と勘違いしていた。

燕は毎日エサを持ってくる彼に

巣へ戻してくれた人間のあたたかさを思い出してくれたのだ。

「村が水底に沈んだ時、心静かに眠れたのはあの人のおかげなので
す。」

夏目たちはだから逢いたがっているのかと思った。
恩人と言えようその人に……

「あ」

たっ

燕は走った。前を歩いているのは四十代くらいのワイシャツに
ネクタイしめた男性。おそらく彼が谷尾崎だろう

燕はしっかりと彼の顔を見た。うれしそうに

夜……燕は心からお礼を言った。でも夏目はため息つく

「村がまた水没するまでいてもいいぞ」

「………私も同意見」

それから毎日谷尾崎を見に行った。言葉を交わせない、相手は見
えないが
燕はうれしかった。

そんな夜のことだった。

森のむこうが騒がしかった。阿吽を引き連れ行ってみる。

そこには夏目と本来の姿のニャンコ先生・・・巨大化したダム底の妖垂申だった

「騒がしいわね、なにやってるの？」

「つ・・・月詠 実はふたば祭りの競争の賞品が一晩だけ人間になれる浴衣なんだ!!」

それさえあれば燕も谷尾崎さんもちゃんと逢えると思って・・・」

「・・・なるほど・・・だったら私も誘ってよ

一人より・・・ふたりでしょ？」「・・・あぁっ」

「あぁー！ーっ!!お前もかよ!!月詠!!!!」

「ニャンコ先生うるさいー」「うるさいぞっ」

こうして二人は競争に参加することになった。

夏目は垂申が作ってくた布製お面をつけてだが・・・

月詠は持ち前の脚力でどんどん先に行く。夏目に人間のため妖たちに玩ばれている感じた。

ニヤンコ先生は見てられんという感じで元の姿に変化した。

「蹴ちらすぞ夏目！こい！！！」

夏目は急いでニヤンコ先生の背中に乗った。

そして一気に先頭チームに追いつく。その中に月詠もいた。

「夏目っ」

一本杉に着くと月詠はなぜかニヤンコ先生に乗り、夏目の襟を掴んだ。

「え？」

「浴衣まで投げるわっ齒あ食いしばって！！！」

「えっちよっ……待っ」

「でやああああああああ！！！！！！！」

「ぎゃああああああああ！！！！！！」 「ほっやるなー」

月詠は浴衣まで夏目を投げた。当然夏目は悲鳴をあげる。その時だった。

ぽっっ

「……………と……………とれた……………」

「……………わああああああああああああああああああ……………」

「……………」

夏目は賞品の浴衣を取れたのだ。会場内では妖たちが歓声をあげる。

夏目が下ろされた後は当然月詠は謝る。仕方なかったとはいえ、思いつきり投げてしまったのだから

でも夏目は許してくれた。おかげで浴衣が手に入れられたのだ。

夏目と月詠は大急ぎで燕に渡した。燕は驚いた。

一晩だけと人間になれる浴衣・・・これを着れば自分の姿があの人にも見れる。

「優しいものは好きです。あたたかいものも好きです。だから人が好きです 夏目様、月詠様」

燕は二人を抱きしめ心から感謝した。

「ありがとう ありがとう夏目様、月詠様」

「いってきます夏目様、月詠様」

いってきます

その夜雨が降った。その雨は三日間も降り続け
二葉村はまた水底に沈んだ。

ある日夏目は月詠とニヤンコ先生を連れて谷尾崎に話しかけた。

淡い青色の花柄な浴衣の女の子に逢わなかったですかと
すると逢ったよと彼は答えてくれた。燕は念願が叶ったのだ
思わず笑顔になってしまう。

「そつだ見てみるかい？」

「え？」

「ちょうど今現像してもらってきたんだ。その時の写真があるんだ」

夏目と月詠は写真を見る

写真には浴衣を着た谷尾崎の隣に青い浴衣を着て人間の姿になった
燕がいた。

燕はちょっと照れくさそうだけどうれしそうな笑顔だった。

夏目と月詠はいつのまにか涙を流していた。

帰る時二人は手をつないで帰った。

燕といっしょに手をつないだ時のように・・・

第10話 五日印（前書き）

夏の旧校舎の肝試し・・・そこに住んでいた時雨様に名を返した。
季節は秋になりつつある時、夏目はまた妖に巻き込まれてしまう。

第10話 五日印

ゾワッ

嫌な邪気がした。．．．しかも、まるでその一部が夏目の家の方角に向かってている。まさか一段と最悪なのに巻き込まれたのかも
しれない。

月詠は阿吽に乗って夏目の家に行ってみた。

コンコン

「夏目、居る？」

「あ．．．．．月詠．．．．．阿吽．．．」

部屋にいたのは夏目と．．．．．
手のひらサイズのニャンコ先生だった。

「どっ．．．どうしたの先生っ！一体何が!？」

吃驚する月詠、夏目は説明する

呪いを受けてしまったと．．．邪気はそのせいだったのだ．．．

とにかくニャンコ先生は今は闘えない。

だから友人帳で三篠を呼び出すことになった。

夏目はニヤンコ先生に言われた通りに陣を書き白い布を羽織り、真ん中に鏡を置き、血を垂らした。

ぱん

「我を護りし者よ 我がもとへ来たれ 汝の名、

」三篠

「

ぱんぱんぱんぱん

どん

後ろに大きな影、三篠がした。彼が久しぶりですなと言った。

夏目のお願いに子分の蛙を助けてくれたから承諾してくれた。

印をつけられたことを説明すると彼は詳しくないから

代わりの者をよこそうと言った。

「では、「ヒノエ」を呼んで参りましょう。」

どろんっ

その言葉にニヤンコ先生は吃驚っ知っているようだ。

「おお麗しのレイコ!」

現れた女性妖怪は夏目をさわさわ撫でながら喜ぶ。

しかし

「おとこーーーーー!?!」

ようやく夏目の性別がわかったのか思いつきり離れた。

夏目は当然グツタリしている。

彼女ヒノエはレイコが好きで男嫌いだ

そして小さくなったニヤンコ先生を見て大笑いする。

「なんか女好きと男嫌いが無ければお婆さまみたい」

「……すごいのか」

「若い頃の父上の修行として小さかった母上を強制的に冥界に送るほどだよ」

「……………」

ヒノエは夏目のことを何者だと聞いてくる。

夏目は嘘言わずレイコの孫だと言った。

ニヤンコ先生の他界したと言う言葉にヒノエは涙を流した。

妖だけどレイコのために泣いてくれる……

夏目はハンカチを差し出す。

「寄るな男め」

「……寄りませんから使って下さい」

レイコさんのために泣いてくれるのですしょうっっ」

「あなたが泣けば向こうのレイコさんも少しは落ち込んだんじゃないですよ。」

ばっ

「……………あのねヒノエさん、ハンカチというのは手や汗を拭いたり

涙拭いたりするものなんですよ。鼻ふくのはちり紙で……………」

「おや、そうかい にしてもあんたもいいわね、金の瞳に対照的な白銀の髪っ!!」

頭に生える犬耳っかわいいわっ!!」

くいきい

すりすり

「いついやあああああっ!!」

ヒノエは月詠の犬耳を引つ張ったり、頬擦りしたりした。

夏目とニャンコ先生は気の毒と哀れに思った。

第11話 五日印

ヒノエに頬擦りされてぐったりする月詠。心なしか耳も垂れていた。

ヒノエは夏目が呼んでいると言われ、さらに人間と

かわいい女の子（月詠）と話してつい興奮してしまつたらしい。

そして彼女はキセルの煙を夏目にふつと吹きかける。夏目はゴホツと

咳き込むと 当然じろ と睨む

するとヒノエは夏目の腕の印を見て言った

「おや これは「五日印」だね」

「いつか印？」

動けない者が扱う呪いで通つた者に印をつける。

いろいろあるが五日間かけて生気を吸つたり、印主へ引きよせて食べたり、

こうして力を蓄えいつか自由になる力を得るのだ。

夏目は妖が居た所を案内したが居なかつた。

ヒノエが言うには蛙を追いかける内に

人に通れない道入ってしまったから会つたんだと言っていた。

とにかくヒノエは調べることになり、夏目とニャンコ先生は家に帰ることにした。

月詠と阿咩は心配だから夏目たちを送つて行く。

「腕痛む？」心配そうに聞く月詠

「うん……」

すると少し前に人形の影がぼつんと立っていた。

夏目たちは横を通り過ぎる。影は動かなかった。

「……何だったんだろう？」

「……さ……さあ……？」

翌朝、月詠はあの影のこともあったので夏目に会いに行った。

夏目は登校途中だった。あれからどうだったか聞いてみると例の影が門にいたそうだ。家に近づくなんでメリーさんみたいだ
メリーさんの解らないニヤンコ先生と月詠に有名な怪談を教える。

53

「電話がかかってくるんだ」私、メリーさん。今、門の前にいるの
つて。

暫くするとまた電話が鳴る。出てみると「私、メリーさん。今、
玄関の前にいるの」

その次は、

『私、メリーさん。』『今、玄関の中にいるの』

「……」

家に帰ったら影は玄関の前にいた。メリーさんのように

するとヒノエが現れた。印主の正体がわかったようだ。強力な邪鬼で長年かけて印を使い、後一人食べれば封印が解けるらしい。

そしてその一人が夏目だ。そいつは待ちきれず影を飛ばしたらしい。

影に重なったらアウト　　そう心に刻んでたその時だった。

どろんっ

ニヤンコ先生が招き猫姿のままでかくなつたのだ。のろいの余波で妖力が安定しないらしい

それから夏目は残り四日逃げ切ることを誓う

とりあえず帰宅はするけど一カ所はあぶないので夜中はこっそり抜け出して野宿

そして朝帰宅して登校なのだが・・・

「いってきま・・・」

影メリーさんがとうとう玄関に入り込んでいた。

ぞっ

「いっいっいきます」

そして明日から三連休のため友達の家泊ると塔子さんに連絡し山に行った。

夏目はヒノエがかしてくれた巻物で式の呼び出しの練習する。

呼び出しは大分様になってきたのだが五日印はもう大分広がっており苦しそうだ。

ヒノエは魚をとり月詠は水を汲みにその場を離れる

でもそれがいけなかった。あの影が来てしまったのだ。

夏目はなんとか避けるが痛みで思うように動けない。

こうしている間にも影が近づいてくる。

「夏目使え」

ヒノエは巻物を投げた

受け取った夏目はしゅると巻物を開く。自分の髪の毛を何本か抜き

「日、通りし道より来れ 陰、被う者。」

呪文を唱えながらふっ息をふきかけると

巻物の文字が浮き上がる。そして

どろん

「来たか・・・」

でも式は小鳥だった。かわいかった。やっぱり呪いのせい
で体力が落ちているせいだろう。

影は式から喰ってやるといつてきた。夏目は慌てて庇う

「「夏・・・」」

「チュン」

式が鳴いたそのときだった。

カッ

光ったのだ。その眩しすぎる光より、

「ぎっ・・・」

影は消えて行った・・・。

ニヤンコ先生は元に戻り夏目の印も消えている。

その後軽くヒノエに怒られたが……

すると三篠が現れた。これは三篠が試したことだったのだ。そして判定は相応しくない。しかし気に入った。面白そうだししばらくは名を預けようと言ってくれた。

ようやく夏目は家に帰れた。

しかし彼に待っていたのは塔子さんのお説教。

連絡先を教えなかったからだ。

怒った塔子さんに夏目は吃驚、

彼は塔子さんの説教を受ける羽目になる

でも自分のために説教してくれる人がいる

ほっとしたのか夏目はバタッと倒れてしまった

それから夏目は風邪を引いてしまった

翌日、月詠と阿吽は夏目の様子を見に行くとなんか騒がしかった。

「つぶれ大福は黙っておれ」ドスン

バタン

「わかめ頭め むしってくれる」

「ううう・・・寝かせてくれ」

ポイ　ポイ

「「!!」」

暴れていたのはニャンコ先生とヒノエだった。あまりの煩さに寝込んでいた

夏目に追い出されてしまった。

「ニャンコ先生、ヒノエさん夏目は寝込んでいるから静かにしないと……」

「まあまあ月詠っ実は美味しい団子があるんだ。一緒にどうぞだい」

「あっありがとう」

「何いつヒノエおれにもくれっ!!」

「やだね」

「んだとー」

ヒノエは月詠に抱きつきながら誘う、ニャンコ先生も催促するが却下された。

でもその後月詠の願いにより

串にささっていないお団子一粒を貰えそうだ

ヒノエは呆れ

ニヤンコ先生はかなり不満げ

月詠は苦笑いだっという。

「食べられただけいいじゃないか」

「よくなー！ー！ー！いつ！！」

「あははははは」

第12話 見える人

月詠は今日は気分を変えて町中に行ってみた。するとニヤンコ先生一人だけぼてぼて歩いてた。

「ニヤンコ先生一人なの？」

「いや、夏目の気配があのお店からする。しかも変わった気配もするな。」

月詠はスンスンと臭いをかいでみると覚えのある匂いと知らない匂いがした。

近くに妖怪の臭いもする。

「………本当だ。」

一緒に店に入ると夏目が髪を操る妖に腕と首を縛られていた。苦しそうだ。

眼鏡の男はおそらく、そいつの主だ。なのにそいつは

「こらこら勝手をするな 私の大切な友人だ。

失礼は許さないぞ」

その時だった。

「失礼はおまえだ。」

夏目は目を見開く。そこにいたのはニヤンコ先生と月詠だったのだ

から。

「私の獲物に気安く声をかけるなガキが」

「私の友達傷つけるなら容赦しないわよ」

カツ

ザシユツ

「ぎゃ」「!!」

ニヤンコ先生は光り、月詠は自らの爪で奴の髪を斬る。

男・名取は眩しい光に驚いたが、むしろ驚いたのは

「そ……その女の子と珍妙な生き物は……?」

ふたりのことを聞こうとした時、店員さんにバレた。

夏目は慌ててコートと月詠とニヤンコ先生を掴み逃げるように走る。

「す、すみませんじゃあおれはこれでっ」

「あっ……待……」

明日、明日また七辻公園で待っている」

翌日夏目達は気になって七辻公園に行くことになった。途中一つ目鬼のお面をつけた女の子の妖と会った

「やあ」夏目は思わず挨拶したがこっちを向いてくれた。

七辻公園に到着すると夏目達は無言になる。

名取はキラメキオーラが出ていて近づきたくないのだ。周りの女性達は頬を赤らめているが……

「あつ夏目————こっちこっち————」

「！？」

そしてニヤンコ先生を見て笑う。猫と言われても饅頭みたいに丸々していて

おもしろいからだ。でも夏目は思う。名取にはきつとバレているだろう。

素直に猫じゃないと言ったらそっかありがとうと言った。

「君は何者かな？人間の気配も感じられるし……」

なのに妖の気配も感じられる。」

「……私は月詠。父は犬妖怪、母は人間の半妖よ」

「ありがとう。そっか　かわいい子分さんだね」

そう言つて二人の頭を撫でる。すると

「子分じゃなくて師匠だ青二才！！」「耳に触れるなバカあ！！」

ゴッ　バキッ

「！？」

どろん

「おのれ主さまに何をするブタ猫と犬耳娘め」

「何だとこのチリチリパーマ」

こうして喧嘩勃発泊まったのはそれから数分後……

止める決めては夏目の拳だった。

実は名取は倉の妖を祓うのを手伝って欲しいと言って来たのだ。

「妖らはいつも理不尽で迷わくな存在だな」

「……そうですかね事情がわからないと何とも……」

「たしかに悪い奴も居るけど、良い奴も居るんですよ？
実際に大妖怪であるお爺さまと父上は人間を愛して半妖の子作りま
した。」

戦国時代の妖怪退治屋は猫又も連れていたそうです。」

「えっ……そうなの？」

「意外だな」

「だからちゃんと見極めてください。」

帰り道また一つ目鬼の女の子に会った。

そして怒られる。夏目がわからないまま彼女の首の縄をひっぱったからだ。

夏目はゆるんでしまった彼女の包帯を巻き直す。

すると彼女は昔話を始めた。

山守りしていたが捕まり、この家と倉を守れと言われた。

倉を開けられたらそいつを祟れと……

そして最近開けた者がいたので祟っていたのだ。

役目を果たさないと縄がしまり首が切れてしまう。

昔は逃げようとしていた。でも無理だった。

手に怪我しながら座っていた時だった。

人の子が心配そうに話しかけて来た。

男の子は優しく包帯を巻いてくれた。

時が経ちあの子が被い人として帰って来た。

「異形とは面倒だね　こんな布きれ一枚の礼もろくに出来ない。」

その声は凄く寂しそうだった。

次の日　名取は旧家の庭に陣を書いていた。

そして夏目達に気づく。　夏目は聞いてみた。

今日被う妖のことを・・・その妖はまさしく昨日の妖ことだった。
夏目と月詠は彼女が来る前にやめさせないと　そう思い走ったが

名取の式・瓜姫の髪で木に縛られる

こうしている間にも来てしまった。

「放してくれ・・・名取さんだめだ」

「行っちゃだめっ」

しかし彼女は陣に入ってしまった。

ピシッ ピシッと鳴り始める

彼女が危ない

夏目と月詠は強引に瓜姫の拘束を解く

そして陣に走った。

バチバチ

「っ・・・」「う・・・」

「何を早く出なさい 私には雷を止められない・・・」

バチバチバチ

「う・・・」

「ちっ」

舌打ちして三人を抱えたこんだのは変化したニャンコ先生だった。

「先……」

ドンッ

横を見る。そこにはニャンコ先生と焦げ付いたお面の女の子がいた。

「生きているよ」

首の呪縛も焼き切れた

彼が言うには呪縛から逃れないならせめて一思いに逝かせてやりたかった。うまくいけば一命とりとめて縄焼いて自由にさせてやりたかったらしい。

そして名取はようやく思い出してくれた。

幼い自分を慰めてくれた妖だったということ。

夏目達に感謝した。おかげで軽い怪我ですんだのだから。

名取は謝る。こんな巻き込み方しなくなかった。

夏目を見ると昔の自分を思い出して

何かを伝えてやれるんじゃないかと……

「それより月詠ちゃん大丈夫？」
名取の問いに

「・・・うん・・・なんとか・・・」

そう言いながら起き上がる。

「もう少ししたら戻るよ。」

しばらくして月詠の姿は元に戻ったという。

第13話 アサギの琴

月詠が阿吽と散歩しているときだった。

「あつ月詠……」

話しかけたのは田沼だった。彼ははっきりと妖見れない。

でも人間の血が流れている月詠だと薄く見れるのだ。

そして彼は下校途中、月詠に話しかけて来た。

「どうしたの田沼？めずらしいね」

「じ……実は夏目が……一瞬女に見えたんだ」

深刻そうに言う田沼

「……そりゃあ……夏目は女顔で見た目奇麗だよ？

周りの妖達もお婆さまに良く似ているっていうけど……でもさすがにねえ……」

「いやっそう言う意味じゃない！！話しかけたら青い長髪の女に見えたんだ

その後いつもの夏目の姿だったが……」

「……そうか何かに憑かれているね。田沼は力は少しあるからなんとなく見れたんだよ。後で夏目に会いに行ってみるね。」

「頼む」

田沼と分かれて阿吽に乗って夏目を探す。

しばらくして彼の匂いを感じとった。

匂いの方向にいくと夏目は呆れながら池にいた。

近くには包帯ぐるぐる巻きの妖がいた。

「おれはやるぜえええ!？」

「……………何やってるの」

「あつ月詠」「だれだお前!？」

「私は月詠 半妖よ。にしても夏目いったい何があったのよ？
田沼から女に見えたっていうし、今池で何か穫ろうとするし。」

「……………いや・じ…実は……………」

夏目は事情を説明する

昨日この包帯ぐるぐる巻き妖怪メリーさん(夏目命名)は
病気により弾けなくなった蒼琴弾きアサギのために器探しにきた。
そして妖を見れる夏目が寝ているスキに
アサギを取り憑かせたのだ。彼女は罪悪感いっぱい
体から出て行く方法は一つ、彼女の希望である蒼琴を奏でることだ
しかし蒼琴はないので楽器作りから始めるため
材料の「線引き」という鯉そっくりの妖怪をとり池にきたのだ。

「……………なるほど……………だったら私も手伝うよ。」

「「「おおっ」」

こうして三人の線引き探しが始まった。

「「「おりゃああ」「ざぱああん

「「「おりゃあああああ」「ざぱぱぱぱん

夏目達は探した。でも人間である夏目は数十分でダウンした。

「どこだー！ー！ー！っ」

「知らなー！ー！ー！ー！っ」

そう言っつて月詠は光の鞭で池から魚を弾き出す。
でも見つからない。

ばしゅ　　ばしゅ

「あつ見る夏目　月詠居たああ　かかれええー！ー！ー！っ」

「！ー！ー！」

「こんにゃるー！ー！ー！っ」

バツシャ　　バツシャ

パシヤ

きよとんとするメリーさん

『ふふ』

夏目の後ろにはアサギが楽しそうに水をかけたのが見えた。

「……アサギか！遊んでいる場合かあああ！！」

「きゃーーーーーっっ」

そしてよじやく

「……と とうたぞ~~~~!!」

ようやく穫れたのだ。口についている釣り糸、これは「良甲」という仙人の物で

これを釣ろうとしているがいつも糸を切られて逃げられてしまっただ。

この糸を弦に使いたい。

次は胴

「地表に頭を出す際の竹の子に貫かれている切り株」だ

でも夏目は倒れた疲れが溜まったのだろう。

メリーさんは背中に背負って夏目を送っていく。

「・・・もう少し　もう少しで弾かせてやれる。」

第14話 アサギの琴

夏目が目を覚ました。

メリーさんは夏目と月詠にアサギが蒼琴を弾けなくなった理由を言った。

彼女の右手の指がもう三本しかないのだ。

土のように崩れていく奇病。ちがう器に入れば進行は遅くなるそう
だ。

でもメリーさんは感謝した。だってアサギが久しぶりに笑ってくれた。

最後に笑っていたのは憧れてやまない壬生様で弾いてた時……

そしてその演奏中に肌が崩れ始めた。

翌日森で竹のはえた切り株を三方向に分かれて探す。

がさがさ

「無いね……阿吽」

月詠の言葉にこくりと頷く阿吽。

いろんな所を探していると

「でかしたぞ夏目!!」

「わーーーーっつ」

夏目が竹のはえた切り株を見つけたゆえ大喜びし、夏目を胴上げをするメリーさん。胴上げされる夏目は吃驚する

「なになに。見つかったの?」

「ああっそうだっ!! さっそく削り出すぞー」

メリーさんは嬉しそうに切り株に手をかけるが

「ふんぬううううう」

根を張っているせいかな固かった。

「……貸して、こついう場合は地面を掘って

少しは緩くするものなの」

「な……なるほど……」

「掘るなら任せなさい」目がキラリ光ったと思ったら瞬間

バババババババババババババババババ

「うおおお!?!」

なんと素手で掘り始めた。叔父、犬夜叉直伝の穴掘りだ。

そして切り株の根元はぐらぐらになった。

メリーさんと月詠は力をいれて抜き始めた。

「ふぬああああ」
「ううーん」

ずぼおつとようやく抜けた。

「よっしやあああ 後は削り出しだ!! 月詠! ありがとな! ゆっくり休んでくれ!!」

「うん。わかった・・・」

さすがに疲れたのか月詠は阿咩と夏目の隣に寝っ転がった。

しばらくして楽器が完成した。

皆は大急ぎで走った。しかしその時運悪く妖が襲って来た。

メリーさんことアカガネが夏目を庇う。

「この!!」「てや!!」「ビュッ」「ぎゃっ」

アカガネと月詠のおかげで倒されたが蒼琴が落ちて行く。

夏目は手を伸ばした。

「夏目・・・」

目を開けると心配そうに見つめる二人の姿。

「大丈夫か？」

「……ああ……楽器は？」

「無事だ お前が守ってくれた」

「しっかり抱えていたんだよ」

アカガネは磯月の森の道にいけるかと聞いてくる

すると夏目……いやアサギ微笑んだ

もしもう一度弾くことが叶うなら

優しくて 大切な 友人のため

アカガネのために弾きたいと言ったのだ

「アカガネ、そして楽器作りを手伝ってくれた月詠さん 聴いてくれますか？」

アサギは夏目の体を借りて音楽を奏でる。

とても暖かくて、やさしくて、美しい音を

こうして彼女は夏目からはがれていった。

アカガネは瓢箪で寝ているアサギを連れて里に帰るそうだ。

ポロン・・・

夏目は残された蒼琴を弾くが美しい音は出なかった。

夏目と月詠は思う、あの美しい音は彼女の心が奏でたのだろう。

「あつそつだ月詠も蒼琴弾いてみる？」

「えっいいいの？」

「やめとけやめとけ夏目 弦が切れるぞ」

ニヤンコ先生は馬鹿にするが

ポロン？ポロロロン？ポロロ〜ン？

アサギ程ではないが中々上手かった。

「何いつ！？」「うわっ上手いな」

「何でああつ何で上手い！？」

ニヤンコ先生が詰め寄ると月詠はさらりと答える

「お婆さまが大妖怪の娘なら学問、剣術、女性のたしなみも出来て当たり前だからっっているんな先生に教え込まれたのよ。あ・・・でも剣術を中心をした戦い方は父上にだけ教わった。毒華爪も光の鞭も父上の技だし・・・」

「.....」

・・・やっばり大妖怪の娘だからだろか

最後以外はお嬢様と言ってもおかしくない内容だった。

ちなみに蒼琴はアサギの次に上手い月詠が貰うことになったそうだ。

第15話 黒ニヤンコ

夜・・・月詠と阿吽が寝ているときだった。

がさがさ

「ん・・・」

繁みに何かが居る。そう思った瞬間

がさっ

現れたのは友人帳を銜えた黒いニヤンコ先生だった。

「えっ！？ニヤンコ先生？どうしたの！？」

慌てて聞いてみる月詠。しかしニヤンコ先生は友人帳を銜えたままどこかへ行った。

その後だった

がさっ

「あっ月詠」

「夏目・・・えっ何でニヤンコ先生がここに？さっき黒いニヤンコ先生が友人帳銜えて向こうへ行ったんだよ？」

驚いたように説明する月詠

「やっぱりここを通ったか・・・ん、何だろう あ的光
上のほうの山道に」

「「ん？」」

光りは点々と並んで移動していた。狐火だ。

どこに行くんだと思ったたら妖たちが人間の匂いがすると言い始めた。

ニャンコ先生は慌てて変化すると夏目を倒す。

ニャンコ先生のケモノ臭のおかげでやりすごせた。

妖たちはむかし主様が人の匂いつけて帰って来たやら

人に化けて遊び美味しいお土産を分けてくれたやら

でも・・・妖たちは人間と関わるとろくなこと無いと言い去って
行った。

その時だった。

「おや そのお姿は斑さまではありませんか・・・お久しゅう」

右目に大きい蝶を止まらせた女妖怪が現れた。

「お、お前は・・・紅峰か」

「先生の知り合いか」

「まあな」

「意外と知り合い多いよね」

そして紅峰は夏目をエサと勘違いしたのかおこぼれを と顔をみた瞬間だった。

「ぎゃっ夏目レイコ!?!」

「阿呆声がでかい!!」だしっ「ぎゃ」

とりあえず夏目はレイコの孫だと説明する。

次にニヤンコ先生は黒いラブリーな猫を見なかったかと聞く

月詠は思っ・・・招き猫のような黒猫じゃなくて?と

すると紅峰は先ほどの列はこれから始まる飲み会でその途中

頭のデカイぶさいく黒猫が会場に向かうのを見たと言った

夏目と月詠は紅峰を説得して連れて行ってくれることになった。

「頑張ろうな先生、月詠。」

「ええ」

ぼんっ

「お前らはまた勝手なっっ」

招き猫姿になったニャンコ先生を見て紅峰は

「ぎゅ

ぎゃああああー！？ちんちくりんにーっっ」

当然のごとく悲鳴を上げた。

「うっうっうっ……おいたわしい……」

「招き猫を依代に封印されていたらしいんです……」

それで夏目がちよつとした拍子に結界の縄を切っちゃったんだけど……

体が依代と馴染んだらしくって「

そう言いながら月詠は阿吽の手綱を引いて連れてくる。

とととと

「こっちか酒はー」

「酒飲みに行くんじゃないぞ」

そんな皆の姿を影から見ていた黒ニャンコがいた。

第16話 黒ニャンコ

夏目は目と書かれたお面、ニャンコ先生は人間の娘に化けて自分の顔が描かれた面をつけた。月詠はと言つと

「よしできた。」両頬に紫色の二本線の入れ墨の様な化粧を施した。

「変わった化粧だね。月詠」

夏目の言葉に月詠は笑いながら説明する。

「犬妖怪一族は基本的に入れ墨みたいな模様があるんだよ。

お爺さまは両頬に一本ずつみたいだし、お婆さまも両頬に一本ずつそして額に三日月模様。

父上は両頬に二本にお婆さまと同じ三日月模様だよ。」

「あゝだからか」

家族の模様のように化粧を施したのかと妙に納得する夏目だった。

こうして夏目達は会場に到着した。

そこには閻魔様みたいな容姿の妖が他の妖たちに酒を振る舞っている。

紅峰はどこにいったんだと聞かれていたが化粧ですよ。とさらりと答える

妖は夏目たちを見て見かけない奴らだなという。

紅峰は普通に連れなんですよと夏目達を紹介する

「ねーちゃん犬妖怪？かわいいねえ」

「この騎竜もなかなかカツコイいなあ」

「ふふ・・ありがとうございます。まあまあ一杯どうぞお酌しますよ。」

「おっいいねえ」

月詠は杯に酒を注いだ後、本来の目的である黒ニャンコを見なかったか聞いてみた。

「すみませんが どなたか招き猫のような黒猫見ませんでした？
友達の大切な物を盗られてしまって・・・」

「おおっ見たぞ」

「俺も」「ワシもじゃ」

「そうですか・・・」

その時 閻魔さま（仮）が主様を救うため夜襲をかける言い出した。

夏目なら止めようとするだろう思った時だった

「いたっ！！！！あっ！待てこら」

夏目が黒ニャンコを見つけたのだ。

月詠と阿咩も後を追いかける

しばらくして黒ニャンコはあっさりと捕まった。

夏目と月詠は考える。わざとここに誘導したのではないのかと・・・

ニヤンコ先生は紅峰に探れと命令する。

力がある妖だけどニヤンコ先生と同じように招き猫に封じられ、封印の影響で知能低下が起きているらしい。

「・・・ん？この気配、覚えが・・・はっ

ぎゃっこの妖気　もしか主様!？」

「何!？」「うそ!！」

驚くのも無理も無いだって招き猫に封印されているのだから

「お、おいたわしい・・・おのれ人間共め」

「ベ・・・紅峰さん、抑えてっ抑えて」

でも招き猫の姿だと気づいてくれない。

紅峰が言うにはレイコに名を奪われたそうだ。

でも招き猫の姿だと名前がわからない

すると妖たちが来てしまった。

夏目は慌てて主様は帰って来ている。

だから主様の名前を教えて欲しいと言ったが
どんだん襲われそうになる

ニヤンコ先生は助けようとするが弾かれる

そのときだった。

人の子だとざわつく中たしかに聞こえた

『様がいれば』

ばん

「「リオウ」 君へ返そう 受けてくれ」

名前はしゆるしゆると主様に入っていく

ドン

招き猫が碎ける。現れた姿を見て妖たちは驚いた。

「……主様」

「主様……」

「リオウ様……」

翼の生えた妖はまさに主様と言ってもおかしくなかった。
彼は夏目と月詠に感謝する

そして彼はみんなに阿呆だと言われた意味が解った気がするといっ
た。

でも月詠は言っただけだ。

「祖父も人間を愛して半妖の子を作りました。父は最初は人間嫌い
でしたけど

いつの間にか人間の母を愛して半妖の私が生まれました。
だから主様あなたは阿呆じゃありません」

その言葉にリオウは驚くが・・・くすりと笑ってくれた。

「さらば、人の子。半妖の子　さらば」

こうしてニセニャンコ事件は幕を閉じた。

「ところで月詠・・・」

「なに？」

「君のお父さんってどんな妖怪？」

夏目は人を愛した月詠の父に興味を持った

「んー顔は美人だけど無口無表情、でもわたしにはふって微笑むけど

手下にとつてそれがすごく恐ろしくて

初めて見た時百年寿命縮んだって言っていた。

怒ったら目を真っ赤にして本来の姿である妖犬に変化するよ。

まああの人落ち着いている方だからめったに変化しないけど・・・

どうしたの？」

「・・・・・・い・・・いや」

夏目は確信した。

月詠はお母さん似だということ

第17話 ホタル

数日前妖騒動でようやく蛍が飛んだ。

月詠は幼い頃を思い出す。

父と母に連れられて蛍を見たことを・・・

あまりの幻想的な風景に思わず手を伸ばしてしまった。

父と母から微笑ましそうに笑われた。

でも悪い気はしなかった。

とても楽しかったのを覚えている。

今度 父と祖母に文を送ろう。

父は昔のことを思い出してくれるかな

思い出してくれたら私はすごく嬉しい・・・

お婆さま 父上 邪見、お元気ですか 私 月詠は元気です。

この土地の妖怪はかなり親しげですが修行はがんばってやっています

す。

私に夏目という人間の男の子と妖からは斑と呼ばれる妖、ニヤンコ先生と

仲良くなりました。

夏目はかなりの力を持っている故いろんな妖が寄ってきます。そのせいで色んな騒動が起こります。

そんなある日 蛍の妖と出会いました。彼女の友人は夏目と同じように

見える人でしたが、大人になってしまったので見えなくなったそうです。

彼が祝言を上げるまでそばにいたことになったのですが 虫の姿でも良いから会いたいと行ってしまいました。

でもそこには蛍を食べる妖がいたので。私たちは大慌てで追いかけて

その妖をぶん殴りました。でも違う蛍でした。

私は友人の男性の所に行くと言嫁と歩いていました。

すると蛍が一匹、彼の手に止りました。少し歩くと

幼い頃に見たような たくさんの蛍が現れました。

とても奇麗でした。父上、覚えていますか

愛する孫であり、娘から届いた文を見た祖母と父・殺生丸はというと

「そういえば蛍を見に行っていたのう・・・どうだったか？」

「・・・・・・・・幼かったゆえどのように光るのか理解していなかった・

・・。」

どたどたどた

「月詠様から文が届きになったのですか！？
あの方がご病気になられたのですか！？殺生丸さまっ！？」

うるさい家来に殺生丸は辛辣に

ゲシッ

「ぎゃっ」

蹴った

第18話 呪術師会合

ひらっ

「？」

ひら・・・ひらり ひら

「何かな これ」

そっぴいなながら月詠は、ぱしっと掴む。それはこんにちはと書かれた紙人形

「・・・何これ？」

ぼおっ

「きゃあっ」

いきなり紙人形は燃えた。月詠の妖力が強いからだろう。そして彼女は焦げてしまったがこれについてる匂いで飛ばした人物の所に行くことにした。

阿吽に乗ってしばらく行くとそこには帽子眼鏡の男性に文句を言う夏目が居た。

「夏目っ名取さんっ」

「やあ、月詠ちゃん。」

「あつ月詠、阿咩！まさか月詠の所にも？」

「うん・・・見ての通り焦げた。」

そついいながら焦げた紙人形を見せた

こうして一行は夏目の家に行くことになった。

途中、名取が帽子眼鏡を取ってしまったので

周りの女性から黄色い悲鳴を上げられたが・・・

しかし家に着いた時目を見開く。扉の前が血で染まっていたのだ。

夏目は慌てて入った。玄関も血まみれ・・・まさか・・・

でも塔子さんは怪我なんてしていなかった。しかも血なんて気づいていない。

妖の血だったのだ。

血は夏目の部屋に続いていた。

名取はニャンコ先生にくどくどと説教する。

「ニャンコじゃないと言つとるだろうが」

血は押し入れに続いていた。

開くと顔だけの妖、そいつは逃げて行った。

そこに残っていたのは先ほどの妖のせいで片羽を失った妖鳥だった。

「うわーーーーー」

「きゅーーーーー」

夏目は急いで布団を引き、名取と月詠は彼を手当する。

名取は夏目達に化け物退治しないかと誘う。

興味あるのだったら呪術師の会合、明日の夕方ここにおいでと言われた。

その日の夜月詠は父に文を書いた。癒しの刀、天生牙を持つ父に

『 父上お元気ですか。月詠は元気です。今日、夏目の家に言ったら玄関が妖の血で血まみれでした。』

彼の押し入れに馬鹿でかい顔の妖がいたのです。そいつは驚いたのか逃げて行きました。

そいつは押し入れで何かを食べていました。

妖鳥です。急いで手当をしましたが片羽を失い、瀕死の重傷です。

父上、この私一生のおねがいです。その子を助けて下さい。 月

詠より』

「あの一殺生丸様・・・」

「何だ？」

「・・・い・・・行かれるので？」

「他の妖に使う気は無いが 娘のためだ・・・行くぞ・・・」

「はっはい」

「殺生丸よ・・・どこかにいくのか？」

「・・・月詠の所だ」

「何ならこれを持って行け、月詠の好物の菓子じゃ。

それとたまには里帰りして祖母と茶を飲もうと伝えてくれ」

「素晴らしいながら包みを渡す。

「承知した。」

第19話 呪術師会合

月詠は阿吽を連れてある場所に着く。すると

「ようこそ おいでだ お客人 入口はこちら」

そこには北口と書かれた傘を持った小さな妖だった。

「ねえ ここに招き猫を連れた人間通った？」

「はい通りました」

どうやら夏目たちも着いた様だ。月詠は彼らの匂いをたどって進む。

そして着いたのは大きな屋敷みたいな建物、その玄関には夏目と二ヤンコ先生

名取 そして彼の式である柊だ。

「それじゃ合流したし、中に入るうか」

「はい」

名取に連れられて皆は建物に入った。

入るとそこにはたくさんの人と妖がいた。
あまりの数に夏目と月詠は驚く

「こんなに……？これ皆本当に……？」

「すーい」

中にはおそらく田沼のお父さんの噂話をしている者もいた。

その時 あれはレイコじゃないか そう聞こえた。

夏目は妖と人が多いせいかわの声か人の声かわからなかった。

名取はお面を勧めてくれた。

名取の体中を動くヤモリの痣の話をしている最中だった。

「名取

新しい式をつけたっていうから見に来たよ」

現れたのは小さな丸眼鏡をかけた初老の女性だった

七瀬という女性は的場という有名な妖祓い人の秘書だそうだ。

名取は夏目たちを紹介する。すると彼女は驚いたように

夏目の顔を隠す面をめくり

「夏目レイコを知っているかい？」そう聞いて来た

レイコは祖母だと聞いた時、孫かと納得する

彼女はくわしく知らないが妖の中ではレイコは本当に有名だと説明

した。

亡くなったと聞いて「妖にでも？」と聞いてくる

聞ける立場じゃなかったと答えると

「だがもうひとりで戦うことはないよ」

そうやさしく言ってくれた。

そして七瀬は名取に例の妖のことを聞いて来た

名取は退治は無理でも封印くらいなら出来ると言った。

その様子には彼女は饞別かわりの魔封じの壺を渡した。

彼女が去って行った後

廊下の掲示板に貼ってある例の妖の絵

夏目と月詠は聞いてみた

「おれを探す時に飛ばした紙人形で あの化け物探せませんか」

「できるのならお願いします」

名取は名を知らないから無理といったが

少し考えて

「この会場には気が満ちているし君たち程の力があれば
ひよっとしたら飛ばせるかもな」

「「お願いします」」

控え室で名取は水で陣を書く

夏目たちに陣の上に手を出させ、その上に一枚の紙人形を置いた。

「目を閉じたら相手の姿を頭に描く 探すよう命じながらね」

夏目と月詠は目を閉じ、あの妖を描く

そして

カサリ・・・と浮いた瞬間

「・・・行け。」

ビュン

ぱりんっ

「きゃーーーーーっ!?!」

「わーーーーーっっガラスを!!」

「ごめんごめん窓あけ忘れた」

「えっ」

とりあえず成功だが建物の中に入ったのだ。

つまりあいつはここにいる。

夏目たちは急いで紙人形を追いかける

柊が先に行った。

しばらくしてある部屋に着いた。

そこでは酒盛りの最中だった。

月詠は聞こえていた。カサカサと鳴る紙の音……そして広がる
血の臭い

上からポタ・ポタ……と血が落ちる

「上っ」

「みんなさがって……」
どおん

天井から柵の太刀が刺さった妖が現れた。

そしてその場にいる者を守るため前が出る。

その時左腕を噛まれたが

「こ……この」「くらえっ」

夏目の拳と月詠の爪で逃げて行った。

夏目と月詠が先生と叫ぶと舌打ちしながらも変化して追って行った。

夏目たちを驚く周りの者たち、しかし夏目たちは周りの皆の静止を
振り切り

すぐニヤンコ先生の後を追いかける。

「夏目っ名取さん阿吽に乗って。その方が速い」

「わっわかった」「うん」

そして阿吽に乗ると

「夏目、手綱はしっかりとにぎって。名取さんは夏目にしがみつい

て下さい」

「う・うん」「妖に乗るのは初めてだなー」

月詠は自慢の瞬発力で一気に行く。その後を夏目たちを乗せた阿吽が飛んだ

外に出た後三人は急いで封印の陣を書き上げる。

陣の中心に七瀬からもらった魔封じの壺をおいて準備終了

そしてニャンコ先生が奴を追いつめる

「よしやるぞ」

ぱんっ

「出よ、我はその手を求む」

どん どん

「掴め 闇を守りし者よ。」

すると壺からたくさん黒い手が現れ、妖にからみつく

そして妖は勢い良く壺に吸い込まれた。

「ふっ蓋!」「はっはい」「えいつ」

三人掛かりで蓋をし、ようやく封印ができた。

でも奪われた。魔封じの壺をくれた七瀬に

しかも彼女はいらなくなったカラスを餌にして捕まえようとしていたのだ

つまり夏目の家に逃げ込んだ妖鳥は式だったのだ。

夏目は当然怒る

しかし彼女は退治されて当然の化け物を人のために使ってやること言う

こうして彼女は去った

ニヤンコ先生は夏目がかけた封印が易く解けるものかと言ってくれた

柊はふつとばされただけで無事だった。

夏目と月詠はもっと強くなりたいと願った。

第20話 呪術師会合 後日談

夏目と月詠は今日も的場一門と妖のせいで重傷を負った妖鳥の看護をしていた。するとその時であった。

「ん？」

「あっ」

ニヤンコ先生と月詠は何かを感じとった。

「来たっ来てくれた！！」

月詠は嬉しそうに外に出るがニヤンコ先生は

「何だこの妖気は！？尋常じゃないぞ」と叫ぶ

「とにかく月詠を追いかけようっ」

夏目達は急いで外に出る。するとそこにいたのは

翁と女の顔の杖を持った小妖怪を従えた紅い模様が入った白い着物と白い袴、

黒い鎧を纏い右肩に白い毛皮を羽織り、月詠と同じ白銀の長髪に金の瞳、

そして額に三日月模様の男性が立っていた。

月詠は嬉しそうな笑顔で叫ぶ

「父上、久しぶりですっ！！」

「………うむ」

「……祖母からの土産だ……」

父上と呼ばれた男性はお土産の包みを差し出す。

「わあーありがとうございます。邪見も久しぶりねっ」

「はいっお久しゅうございます。」

そしてその光景を見た夏目たちとはというと

「ちっ父上ええ！？月詠のお父さん！？」

「似てんっ全然似てないぞ！！」

それを聞いた邪見は当然怒る

「これっ小僧！！誇り高き大妖怪、殺生丸様を庶民的にお父さんなんてっ

しかも娘である月詠様を呼び捨てに・・・」

「いーの邪見」

「えっしかし」

「私の友達よ、呼び捨て結構！大歓迎よ！」

「あーも性格も容姿もりんに似おってーっ」

「誰だそれ」

「とにかくっ父上、文に書いた通り今瀕死の妖がいるのです！
あなたのお力を貸して下さいっ」

「えっ月詠 一体どういうこと？」

「後で説明するけど父上は一回だけ死んでしまった命さえも
生き返らせるほどの力があるの。それさえあれば・・・」
ニヤンコ先生は驚いたように

「まさか治るのか・・・」

「ほっ本当なの月詠!？」

夏目の問いに月詠は

「奪われた片羽があればもっと良かったんだけどね。」

夏目は急いで殺生丸に頭を下げる

「俺からもお願いします!あの妖鳥を助けて下さい!!」
夏目の必死さが伝わったのか、はたまた娘の友人だからか

殺生丸は言った。

「小僧・・・そいつはどこだ・・・」

その言葉に夏目と月詠はペアっと笑顔になる。あの子が治るのだから

「こつちですっ!!!」

そして部屋に案内するが邪見が言ってしまった。

「なんだなんだ小部屋ではないかっ!」

「こべっ・・・」

「こんな狭い部屋に通すなん」げしっ「てっ」

「城と一般家庭の部屋を見比べないっ」「・・・はい」

ぎりぎりぎり邪見を踏んでお仕置きする月詠

「あーもー怒った所は殺生丸様に似て……」
さめざめと泣く邪見

しかし殺生丸・月詠親子は無視だった。

「父上お願いします。」

「……うむ」

すると彼は腰の刀を抜いたのだ。

そのことに夏目とニヤンコ先生は青ざめる

「「待ったあああつ!!」」

ガシツ!!

「!?!」

思わずしがみついて止めてしまった。

「ちょっとつあなた何しようとしているんですか!？」

「あー夏目私の説明不足。後にするんじゃないかった。」

月詠は苦笑いしながら説明する

「あのね。父上のその刀は私のお爺さま・鬪牙王の牙から作られた

天生牙つていつて癒しの刀なの」

「癒しの刀？」

「これが一回だけ蘇らせれる力の正体よ。」

真に人を慈しむ心があれば一振りで百人の命も救える程なの。」

「ひゃ・百人」

「この世の人は切れないし大丈夫だから安心して」

「本当にそうなのか？」

ニヤンコ先生はまだ疑っていたが

殺生丸はさらりと言った

「……邪見は真つ二つに切られたが生き返ったぞ……」

「ええっ邪見初耳よっ」

「はいっ本当にうれしゅうございました」

とにかく本物だとわかった

そしてとうとう天生牙で妖鳥のそばの何かを切った。

夏目たちは何を切ったかわからないままだが

すると

「……う」

目を開けてくれた

「よっ……よかった君大丈夫？わかる？」

夏目の問いに妖鳥は笑顔でこくりと頷いてくれた。

「父上っありがとうございます！」

「本当にありがとうございます！！」

「……あ……あ……りがと……」

「お主なかなかやるな」

夏目たちのお礼に殺生丸は

「娘の願いを聞いただけだ。

……月詠、祖母がたまには里帰りして一緒に茶を飲もうと言って

おつたぞ」

「ふふっ……わかりました。この辺りで評判の七辻屋の饅頭をお土産に」

里帰りします。お茶の時は父上もご一緒に……」

母親ゆずりの笑顔で笑う月詠に殺生丸は

「……ふっ……甘いものは苦手だな」

微笑程度だがほんの少し笑ってくれた。

邪見はありえないことに怯えていたが……

殺生丸達が帰る時、夏目達は見送りに外に出た

「邪見……帰るぞ」

「はいっただいま」

するとその時だった。

殺生丸の目が紅くなり顔もどんだん犬になっていく

そして最後にはバカでかい妖犬の姿になった

「なんだこれは……!?!」

私よりでかいではないか……!?!」

ニャンコ先生はショックを受けたように叫び

「……でか」

夏目はただただ呆然

「きゃーーーーーっ父上かつこいいーーーーー!!」
娘の月詠は興奮ぎみに叫ぶ

「父上ーーーー邪見ーーーー」
道中気をつけてーーーーー!!」

月詠の声に殺生丸は頷き、しがみついている邪見は手を振り、
空へ空へと去って行った。

妖鳥は回復したが片羽のまま……だから八ツ原の中級たちに頼
んで
そこで暮らす事になった。

「夏目っニヤンコ先生っお婆さまからのお土産食べましょ？
この匂いは私の好物の菓子ね！」

「何いつ!? 夏目! 茶を入れろっ茶!!」

「はいはい……月詠ありがとう……あの子を助けてくれて」

「ふふ……父上呼んだだけだよ。夏目だっってお願ひしたじゃない」

「ははは……」

妖鳥を助けられて嬉しそうな夏目と月詠だった。

ちなみに菓子最高級練りきりで見たい目も見事な細工であり、

夏田は食べづらかったという。

第21話 雛かえる

今日、月詠は夏目の家に遊びに行った。すると門の前に誰かがいる。

でもその人は消えた。妖だったのだろうか……。門には式と書かれていた。

夏目に聞いてみるとそいつの主は今、夏目たちがかえそうとしている卵の雛を食べたいと言っているそうだ。

でもその妖には悪いがこの卵は生きている
もう少しだけ生かしてあげたいそうだ。

ピシ……ピシ……

「……あっ」

「せ、先生、月詠 卵が」

「生まれるわっ」

「何!?!?ピヨピヨピヨ」

カッ

ぱりんっ

「「!!!!」」

もぞ

夏目は覗き込む……。雛は角がはえた人がたの赤ちゃんみたいだった。

「「「!!!!?!?」」

思わず衝撃が走った。
だってヒヨコみたいな感じかと思いきや人がただから……

「くしゅん」

「あ」

くしゃみした。裸だから風邪をひいてしまう。

バタバタ

「わー産湯産湯」

「わータオルタオル」バタバタバタ

「きゃー着物着物」

バタバタ

「ねえ夏目いらぬ布と裁縫道具とかある？」

「ハンカチと家庭科で使った裁縫セットだったらあるから」

「わかった」

とりあえず雛は目玉親父のようにお椀で産湯に入れられた。

ニャンコ先生曰く角から見て辰未の雛だそうだ

雛は最初に見た生物に変化するため、今回人がたになったのだ。
つまりニャンコ先生が先だったら招き猫型、月詠だと
人がたに犬耳になる。

「まあともあれ無事生まれてよかったな」
夏目はタオルで「ごしごしと雛の体を拭いてあげると雛は笑ってくれた。」

「夏目、着物できあがったよ。」

「ありがとう。」

雛に月詠お手製のハンカチ製着物を着せてあげる。

「よし、こんなもんな。」

「ふふ・・・かわいいっ似合ってるよ。」

嬉しいのかニコニコ笑ってくれた。

夏目と月詠もニコニコ笑ってしまう。

今日から雛の育成日記をつけることにするわ

雛は意外と器用だったわ。紙で壺のような巣を作ったの。

夏目と私を引っ張って入ろうってやっていた。それがかわいかった。私たちが小さかったら入ってあげれるのに残念。

ちなみにニャンコ先生は怒っていた。読みかけの経済新聞なるものを材料にされちゃったらしい。

今日は情操教育のためぴくぴくに行つたわ。

雛は花とかに興味を示しているの。

でも数日でヒヨコサイズがハトサイズになった成長は本当に早いわ。雛はにこつと笑ってくれて私も夏目も思わず笑顔になるんだけどニャンコ先生は笑顔というより、にやり顔で雛も私たちもこわかった。

ニャンコ先生のデカくなつたら巣から旅立つという言葉に

夏目が名前をつけてやらないと思つてたのにと呟いたが

ニャンコ先生が勝手に卵から生まれたからタマちゃんと呼ばれたらしい。

当然夏目は異議ありと怒る。私も安直すぎる思つた。

少しずつ少しずつ大きくなつたのにタマちゃんは衰弱していった。

ご飯をあまり食べなくなつてしまったの。

「む？何やら妖が屋敷内に入ってきたな」

「この臭い・・・鼠ね」

現れたのは鼠の文字を崩して書かれた傘を被った僧侶のような妖だった

ニヤンコ先生は猫じゃらしで鍛えた右フックでと言いかけたその時彼が投げた札で貼付けにされた。

そのスキに夏目と月詠はタマを連れて逃げる

しかしすぐに追いつかれてしまった。

ガッ

ザザッ

「う・・・

鼠は人間は所詮非力な者、妖は災いにしかならんと言った
その言葉に月詠は切れた

「うるさいっ！！あなたに何がわかる！！たしかにわるい妖もいるけどね！！

人を愛する良い妖もいるの！！だから半妖の私が生まれたの！！

そんなこと言わないで！！」

その時タマが成獣になったのだ。

姿は竜より鳥に近かった。そしてタマは鼠を噛み付く

我を忘れてしまったのだ。

タマはフーフーと息が荒い。

しかし夏目と月詠が優しく撫でた。

「帰ろうタマ」

「タマちゃん帰りましょう?」

タマの脳裏には今までの楽しい日々

「帰ろう」

タマは自らの背中に夏目たちを乗せ空を飛ぶ

夏目は悲しかった昔を話して上げた。

夏目たちをおろすとタマは遠くへ旅立った

鼠はまた卵を探そうだ

あの日夏目が鯛焼きがたのおむれつなるものを作ってくれた。

鯛の形の卵焼きでおいしかった。

第22話 春に溶ける

今日夏目たちは強打した腰に効く薬草をとりにニャンコ先生に連れられて

しばの原に来た。

そこにはかつて二体の守り神を模した石像があったが、今は一体の石像だけがある。そして辺り一面雪景色、足跡もないのだが・・・

ニャンコ先生が躊躇なく足跡つける

こうして夏目、月詠、ニャンコ先生、阿吽の強制的雪合戦が開始された。

一通りやった後夏目と月詠は雪玉や雪兎を作った。その時後ろの石像から何かが現れる

「おや・・・人の子私の姿が見えるのか

・・・丁度良い私を移す依代が必要だったのだ。」

影は夏目に襲いかかったのだが

夏目が避けたので後ろの雪兎に

どんっ

「っっあっ」

入ってしまった。

雪兎に入ってしまった妖はショックを受けたように声をあげるが
この際いいかと自分のことを紹介した。

彼の名前は玄。石像に宿る妖だそうだ。

彼は三日前に切られた魔封じの木に封じられていた奴を
放ってはおけないと言った

夏目と月詠は感じる。

これは悲しみと憎しみだった

しかも玄の相方はどうしたのかという相方・翠は粉々に砕けてし
まい

玄はひとりぼっちなのだ。

次の日月詠は玄のことが心配になって夏目の家に行ってみた。

「あ、いらっしやい月詠様」

「え？……うさぎ耳……雪の匂い………玄？」

「ああ

体がなじんだので短時間だけ本来に近い姿になれるんだ」

「あーなるほど　なんか父上たちとは逆ね。

父上たちは普段は人間の姿だけど本来の姿は化け犬だから」

「へーそうなんだ」

すると支度を終えた夏目たちが現れる。

夏目のクラスメイトが言うには森林公園が三日前くらいから枯れ始めたらしい。とりあえず行ってみることにした。

進む度に腹を喰われた魚が落ちていた。草木も枯れている。

さらに進むとボロ屋があり中から何か感じられた

中を覗くと玄は誰かの匂いを感じ走った。

その瞬間だった。

ガタンッ

「「!!」」

悪霊が現れた。

悪霊はゆるさない　ゆるしないと恨めしそうに言う

夏目に襲いかかるうとしたとき

玄が身を挺して止めた。

彼は悪霊を抱きしめながら言った。

「これが翠なんだ」

翠が暴れたため逃げられた。

玄は悲しすぎる話をする

彼らは森を守っていた。

だがある日作物が取れなくなり、村人達は拝みに来た。

でも玄と翠は被い神、畑を潤すなんてできない。

近くを通りかかった妖に聞いたり、邪気を被ったりした。
なのにできなかつた。

人間たちは彼らのせいにし、玄は獅子と呼べぬ形になり

翠は谷底へ落とされ砕け散った。

彼女は悪霊になってしまった。

あれから聞き込みを収穫は無かった。
とりあえず今日は遅いから夏目の家に泊まらせてもらった。

しかしその日の夜、玄も悪霊になりかけた。

彼は友人帳に加えてもらって 何かがあつたら止めてと言ったのだ

「ひとりはもう嫌だ」

悲しい声だった。

夏目と月詠はひとりじゃない おれ達がいると励ます

でも玄は自らを役立たずだと言った

夏目と月詠は言ってあげた

「玄は人を嫌いかもしれないけどおれは玄が好きだよ」
「私も翠のためにがんばる玄が好きだよ」

「虹に願おうとしてくれた翠のことも好きだよ。」
「だからそんなこと言わないで・・・ね・・・」

玄は二人のやさしさにふれて涙をポロポロ流した。

たくさん泣いて小さな雪鬼の姿に戻った。

第23話 春に溶ける

数日後 翠らしき影を見つけたという情報が入った。

夏目達は急いでその場へ向かう。

封印する方法はただ一つ、玄が翠を抱きしめ放さなければ二人ともあの石像へ帰れるそうだ。

不確かな方法……でも玄の覚悟は本物だ

そしてとうとう翠を見つけた。

しかし翠の攻撃により玄はコロコロ転がって行ってしまった。

しゅるしゅる

「！ 逃げる」

「待て」

夏目と月詠は逃げようとする翠を掴んだ。しかし火傷するかもしれないくらい

熱かった。でも二人は放さなかった。

たとえニャンコ先生が放せと言っても

「だめだ ここで逃がしたらまた」

「玄と翠のためにも放せないわ」

「先生 玄を 玄をここへ・・・」

すると二人の中に翠の記憶が流れ込んだ

また願いを叶える三色の虹が出なかった

早くまた雨降るかなとつぶやく翠

玄は雨は寒いから嫌だと言う。

そんな彼に翠は微笑みながらあなたがいるから寒くないと言ったのだ

「さむい

さむい

さむい

さむい」

その翠が寒いと言っている。寂しそうに・・・悲しそうに・・・

ニヤンコ先生が強制的に夏目達を剥がそうとしたその時だった。

玄が翠を抱きしめた。

じゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅ

「さむい さむい さむい

そんな彼女に玄はやさしく言ってあげた

自分も寒かった、一緒に帰ろうと・・・

「君の心がいつか癒えたら　また一人で虹を待とう
私も翠、幸せだったんだよ」

玄の体が消えて行く

でもその時　翠が涙を流し、一緒に消えた。

「さようなら

さようなら

夏目様

月詠様」

その後夏目達は玄と翠のために三色の虹のかわりに
花の種を植えることにした

三色の花をしばの原に……

二人は喜んでくれるだろうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513w/>

妖犬友人帳

2011年10月12日16時48分発行